２　武闘派女子に屈した不良たち、屈辱のフルチン嘲笑、キ〇タマ握りで玉責め制裁。そして包茎を引っ張られる礼二。

　皆縮み上がっているが、それでも元のサイズで差は出る。

「あの人、チ〇コ小さくない？　うけるわ」

「笑っちゃ悪いよ、チ〇チ〇小さいなんて、かわいそうでしょ」

「うちの弟よりは大きいよ」

「あんたの弟二歳でしょ！　二歳と比べられる方が悲惨よ！」

　もっとも笑いものになっているのは、リーダー格の男だった。

　逆に、縮み上がっているなりに、四人の中では大きいのは半ばパシリ扱いの後輩だった。

「っていうか、あのちょっとましな子、一年生じゃない？」

「やだ、それじゃチ〇コで下克上起きてるってこと？」

　男性器の大きさは非常に繊細な話題だ。

　それを理解しない女たちによる遠慮の無い比較と、容赦の無い小さいだのという扱いは四人から血の気を奪っていた。

　リーダー格が前を隠そうとする。

「あら、おチ〇ポ小さい人は大変ね」

「今隠してももうフライドポテト級に小さいってわかってるのに」

「みんな、一番小さい人がおチ〇チ〇隠そうとしてるよ、見てみて！」

　隠そうとした腕が硬直する。いや、全身身動き一つとらなくなるリーダー格。

　五人の中で一番立場が上だったのが、今最下層の扱いだ、頭がついていかないのは当然だろう。

　それも、一物の大きさによってだ、受け入れがたい状況だ。

「さあ、最後はお前だ」

　倒れていた礼二の腕を掴み、引き起こす高菜。

　背は高いが横幅はない、モデル体型といえる。

　にもかかわらず、相当な力だ。

「や、やめて……あっ」

　パンツのふくらみを掌で被う海子。

「じゃあキ〇タマ潰しコースにするですか？」

「わかった、脱ぐから……」

　震えながら言いつつ、自力で立つ。

　皆の目が集中する。

　パンツを脱ぐと、歓声が挙がる。

「小さい！　何これ！」

「そっちの奴より、さらに小さい！　こんなチ〇ポあるんだ！」

「最小記録更新！」

「もてそうなチャラ男のおチ〇チ〇が一番小さいなんて！」

「嘘でしょ、弟のより短いじゃん！」

「人生終わりじゃん、あの年でチ〇チ〇これじゃ！」

「恥ずかしくて女と付き合えないよ、あん何小さいペ〇スじゃ」

「玉袋も干し柿みたい！」

「中身入ってるのあれ？」

「しかも包茎！」

「わ、本当に皮かむってる！」

「小さいのに気を取られて、包茎に気づかないなんてどんだけ小さいのよ！」

「わかった、あの小ささは包茎を隠すためのブラフって事ね！」

「なにそれ！」

嘲笑と爆笑の嵐。

言葉の暴力でキ〇タマを握り潰される礼二。

半ばあいた口から涎が垂れる。

視界が極度に狭まる。

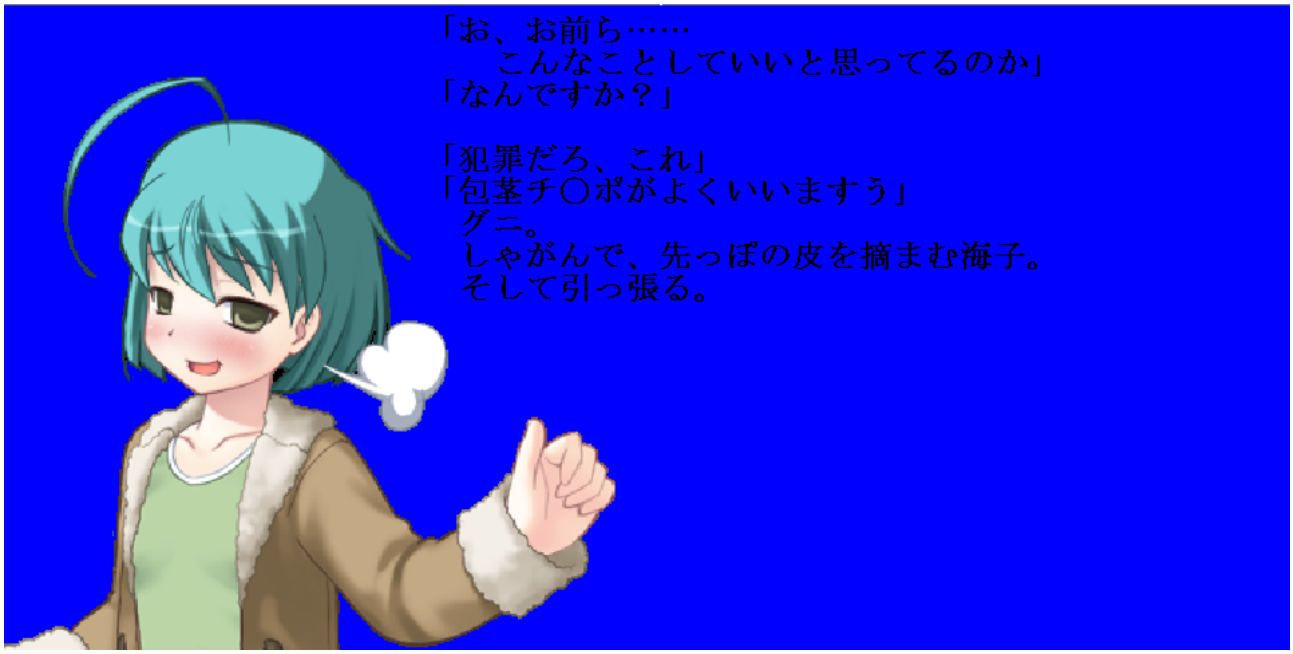
一人だけ別格の短小包茎扱い。

それは駅で配っているティッシュを一人だけもらえないときの屈辱をもっと強烈にしたようだった。

それでも、礼二は口を開く。

いや、それだからこそ、何もしないではいられなかった。

「お、お前ら……こんなことしていいと思ってるのか」



「なんですか？」

「犯罪だろ、これ」

「包茎チ〇ポがよくいいますう」

　グニ。

　しゃがんで、先っぽの皮を摘まむ海子。そして引っ張る。

　童貞の礼二。

　初めて女に触られるときにはどんな感じか何度も考えてきた。

　まさかそれが包茎責めだとは、もちろん思ってもいなかった。

　初めての相手は当然、短小にも包茎にも気を使って、何も触れてこないはずだった。

　それが実際には、それに直接的に触れてくる。

「おお、皮だけご立派サイズですう。おチ〇ポ小さいのに皮だけすごいなんて……これは皮肉な話ですよ？」

「は、放せ……あっ」

　周りから、女が群がってくる。

「おとなしくしなよ」

「あんな小さいチ〇ポ、女の子に触ってもらえる機会なんてもうないんじゃね？」

「ありがたく感謝しな、短小包茎くん」

　女相手とはいえ数人にしがみつかれ、一人にいたってはキ〇タマを握りさえした。とても抵抗不能だった。

　その姿を見て、他の女子も動く。

　皆、楽しそうに笑っている。

　全裸の男を、自分たちだけ着衣で寄ってたかって押さえ込むのが面白そうだと思った。

　だから真似に走っている、そうとしか見えなかった。

「や、やめろ」

　女子は二十人以上いる。

　礼二たちは五人。

　四対一の割合だ。

　男の力とはいえ、この数の差で、しかも制圧にキ〇タマを容赦なく狙ってくるのでは押さえ込まれざるをえない。

「女に力で勝てない気分はどう？」

「うごいちゃダメよ、キ〇タマ握ってるからね」

「っていうかこの二番目の短小、前から駅で威張ってたリーダー格だよ」

「まじ？　二番目にチ〇チ〇小さいのに？　こんな小指のライバルつけてヤンキーとか恥ずかしくないの？」

「こんな短いおチ〇ポでも立ってオシッコできる？」

　攻撃として、嫌がらせで悪口を言っているのだ。

　そう必死で考える男たち。

　モノが小さいのが、本当にそれほどの嘲笑に値するなどとは考えたくも無かった。

　この中ではましでも、後輩のも平均から見れば大きくはないのだ。

　礼二は、まだ包茎を引っ張られていた。

「伸びる伸びる。開いたら先っぽ見えるですか？　う、くさっ……包茎チ〇ポってやっぱり臭いですね」

「こんなに小さいんだ、別にどうでもいいだろう」

「そりゃそうですう。こんな小さいんじゃオシッコ専用機ですう。なら臭いまま放って置く気持ちもわかるですよ」

一様綺麗にしているつもりだ。

風呂で洗ってからまだ一週間しか経っていない。

「ああ、くっさい包茎チ〇ポですう！　もう持ってられませんよ！」

皮を引っ張る海子。

「ああっ」

縮んでいるとはいえ、皮は縮まない。

だからこそ余計に包茎が強調される。

縮んでいない皮なので、普段どおりに伸びる。

「おお、凄いですう！　放すと……」

ゴムのようにパチン、と戻ることはない。

漫画ではないのだから。

ため息をつく小柄な女。

「なーんだ、つまらないですう。コントみたいになると思ったのに。で、キ〇タマに当たると」

「海子、そろそろ引き上げるぞ」

海子、そういう名前なのか。

今更ながら知る礼二。

一瞬、仕返ししようかと考える。

顔、名前、学校。

それだけ分かっていれば見つけ出して、一人の所を狙えるだろう。

だが、それはやめるべきだろう。

失敗したら、絶対にまずい。

まずいというか、単純に絶対、キ〇タマ潰しという絶望が待っている。

治るからいい、などとは思えない。

普通の男なら、想像の中でも肉玉が潰されるのは考えたくもないのだ。

まして実際に潰されるなど。

今や、完全に礼二は目の前の武闘派娘たちに対して心を折られ、戦う気を失っていた。

強いのは高菜と海子二人で、他の女子たちは一様空手部だと言うだけで、礼二たちより飛びぬけて強くもない。

細かいことは知らない礼二だが、他の者も強いなら一緒に出てこないのはおかしいと気づくことは出来るはずだ。

だが、そんなことはもう頭の片隅にも無い、考えられなかった。

肉玉の痛みが頭を支配し、肉棒というにはささやか過ぎる一物への嘲笑が心の動きを止めていた。

もうこの女たちとは関わりたくない、それしか考えられなかった。

「それじゃ、これに懲りたらこの辺でナンパなんかするなよ短小ども」
「そんな小さいんだからね」
「あ、そうだ、顔とチ〇コ写真で撮っとこうよ」
「いいね、ナンパ続けたら流しちゃうよ、ってことで」
一旦離れようとしていた女たちが再び集まり、次々に顔と股間を携帯カメラに収めていく。
これではこの辺でナンパなど無理だ。
続けても、写真がうさ女に出回れば誰が引っかかるのか。
女たちが去っていく。
後には、全裸の男たちが残された。
便所でなければ、その場に倒れこんでいただろう。
必死で立ち、とにかく服を着る。
さっさとこの場を去らなければ犯罪者にされかねない。
高菜たちに呼ばれてここに来てから、時間はさほど経っていなかった。
だが礼二たちにとって、忘れられない時間となった。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？

よろしければ、続きは製品版で。